

モラロジー研究所編

『総合人間学モラロジー概論』

高瀬 浄

互敬の世紀をひらく道徳原理

本書は編者である故永安幸正氏における遺書となった書である。聞くところによると病床で本書の全体の枠組みや校正を行われたと伺っている。しかし誰もが氏が逝去されるとは思っていなかった。この世の無常さを改めて感ずる。顧みるに私は氏が高崎経済大学で教員をしていた時以来からの良き研究仲間であった。その後氏は早稲田大学へ移られた。さらに麗澤大学の方へ割愛された。氏は麗澤大学二代目学長である廣池千太郎先生を心から尊敬していた。私も氏のはからいで生前に何度か廣池千太郎先生にお会いしたことがある。立派な方であつ

た。したがって氏と私の交誼は三十年以上に及んでいる。いま改めていろいろと思い返される。氏は将来期待される経済学、社会システムの研究者であつただけに、惜しまれる。今となればただ安らかに眠られることを願うのみであり、ご冥福を心から申しあげる。

1 本書の構成と内容

さて本書の内容について考えてみる。本書の冒頭で「人間はつねに幸福を求めて生きているものである」と述べており、その幸福とは広範かつ多様な内容をもつ言葉であるが、その最大公約的な幸福感は本書によると「安心・平和・希望・喜び」にあると考えられる。それゆえに、本書の課題は「人間の生存・発達・安心・平和・幸福からなる究極の善」（倫理道徳）の研究にある。そのほか本書によると「モラロジー」とは、かかる精神の中心で働くものを「品性」と名づけ、その品性の内容と働きを理解し、さらに改善していくことが不可欠な課題である」とされる。その趣旨にしたがって本書は以下で示すように、基礎編（1〜4章）と実践編（5〜10章）からなるものである。

本書の構成とその主要目次
基礎編

第1章 倫理道徳のめざすもの

はじめに

- 1 人類の生活と道徳
- 2 人類共通の倫理道徳
- 3 これからの倫理道徳
- 4 道徳実行の根本精神

第2章 人間力と品性の向上

はじめに

- 1 人間存在の実相
- 2 人間力をつくるもの
- 3 品性―善を生み出す根本力
- 4 生と死を巡って

第3章 道徳共同体をつくる

はじめに

- 1 交響する生命と文化
- 2 相互扶助と公共精神
- 3 人類社会の基礎共同体
- 4 祖国愛と人類愛

第4章 普通道徳から最高道徳へ

はじめに

- 1 倫理道徳の進化
- 2 求められる最高道徳
- 3 倫理道徳の源流を求めて

4 最高道徳の広場へ

実践編

- 第5章 自我没却
- 第6章 正義と慈悲
- 第7章 義務の先行
- 第8章 伝統報恩
- 第9章 人心の開発救済
- 第10章 道徳実行の因果律

付録

- 廣池千九郎の個人史とモラロジーとの関係について
- 廣池千九郎略伝―道徳の研究と実行への歩み

本書は以上のような構成からなるものであるが、以下、本書全体の方向性とポイントについて紙幅の範囲で取りあげてみる。まず編者は現代というものをどのよう捉えられていたであろうか。「現代とは、科学技術が発展し、人々の価値観が変化し、人類社会のグローバル化が進み、それと関連して新たな課題が発生する」し、「中でも、すべての生き物の生存を脅かす地球環境問題は、今後の世界にとって最も根本的な課題である」と考えられる。したがって「このような時代を迎えて、人間の目的とする善の内容はいつそう地球規模のへと拡大させざるをえない」とする。その結果「現代は、共生とい

う考え方が、人間の基本原理として重要な意味をもつものになる」。それに対応する方法として差し当たり国連レベルでの「持続的発展」や「人間の安全保障」などが注目される。

それゆえに「国家を守る国防というこれまでの意味の安全保障とともに、一人ひとりの人間が、飢餓や病気、貧困や教育の不足などの問題を乗り越え、自由な機会を得て人間としての能力を開発することであり、それを人類全体が協力して保障し合う必要である」という考えからなる。それだけに国家の枠にとらわれることなく、一人ひとりの人間についての生命の安全をはじめ、基本的人權の保障を図る相互依存、相互扶助の立場が見直しをされる。したがって、本書の課題意識である「倫理道徳」も当然、その立場から考察され、グローバルな視線から個人の次元にいたるまで幅広い展開が試みられる。換言するならば現代という視点をまさに現代世界という視野から考察しており、それが本書の特色の一端を浮き彫りするものである。その点を最初に指摘しておきたい。

だがその半面、現代世界の不可避的な文明の逆説として捉えられる現代の科学技術の最たるものは核問題やミサイル兵器といってもよいのでなからうか。それが人の命を助けるものでなく、むしろ人命を奪う殺戮兵器となっているのが現実的ではないか。二十世紀に起こった人

間の大量殺戮が二十一世紀により大規模な形で起こる可能性すら否定しえないものである。しかし本書はそれに關して直接触れられていないが、現代世界の分析する上で避けて通れない問題ではないかと思う。

そのような問題提起をした上で現代の文明社会はゆったりした時間の流れが失われ、非常に加速化しており、社会の強さと弱さが同居し、喪失と獲得とが葛藤する世界へと変容しつつある。この点になると「文化文明問題」(文化の矮小化と文明の肥大化によるパラドックス)への対応などはどうであろうか。現在のバーチャル・リアリティをみても自然から離れた人間の精神上的の仮想空間の発達には右の脳より左の脳が主導し、人間自身よりも無気質的な存在に向かっている。これらにどう対応するかが問われる。

それだからこそ現代のモノの豊かな社会問題としてモノより心の問題、あるいは現代科学(近代知の世界)を超える上でむしろ「倫理や宗教」などが再浮上してくるのではないかと思う。この点を如何に透視するか、本書がまさに「倫理道徳」を提唱する所以でもあろう。ただ気になるのはその歴史的潮流が直線的な流れによるものであるか否かである。多様化する中で時間の流れも多層化し、疑念が残るようにも思えるが、それはどうであろうか。そのような問題意識を秘めながら本書の内容を以

下で紹介し考えてみる。

2 本書の倫理道徳観とその展開——生命・自然・未来——

その意味で本書の中心課題は「倫理道徳」観を巡る問題にある。それゆえに、あらゆる諸々の現象をそこへ向けてどう絞り込んでいくかが問われる。本書によると「地球上のすべての存在は、互いに密接に関係し合っています。例えば、私たちが呼吸する酸素は植物から供給されますし、必要とする穀物、野菜、卵、肉などの食物は、もともと地上に育ち、川や海に生息している生き物です。他の多くの生き物も、複雑な食物連鎖でむすばれています。また、私たち人間は、社会を構成し、ほとんどの生活必需品を空間的に広範囲に住む他の人々から得るとともに、時間的な広がりの中で、過去や未来とも複雑につながっています。このような事実を見つめると、結局、私たちは全地球的な規模の相互依存、相互扶助によるほか生きられない事実から、倫理や道徳と公共性の問題が立ち現れるのである」と指摘される。

しかもそのさい本書によると、倫理道徳を捉える上で「求められる善は、個人的側面と公的側面から成り立っています。その個人的側面の善は、これを私的善と呼ぶことができます。私的善というのは、個人の生活領域つまりプライバシーとしての善であって、自分自身が感

じる安心、希望、喜びであり、そのための条件、健康やさまざまな能力、経験、知恵、仕事、物的資産、家族があり、さらに人間関係、社会的地位や信用などが加わります。健康に留意し、能力や経験を生かして仕事に励むことは、この私的善を高める」ことが不可欠であるとされる。

もう一つの「公共的側面の善は、へ公共善と呼ぶことができます。公共善とは、個人の領域をこえて他の人々、さらには社会全体に関わる善です。……また公共善は人類の生存基盤である大気や土地をはじめとする自然、法律や制度、歴史を経て積み重ねられた言葉、知識、科学、技術、文化、同朋感情など多様な物からなっています。国家や国連による安全保障や治安などは、国家的、世界的な規模での公共善であり、さらに地球規模の保全と人間の安全保障は地球規模の公共善と言えます。こうした公共善を具体的な形で示すものが公共財であって、政治、経済、外交、教育、医療や年金、福祉に関わる法律や制度などは、いずれも公共財です。その公共善や公共財を尊重する心が公共心である」と考えられる。

それゆえに私的善はもちろんのことであるが、「これからの倫理道徳は、人類の持続的発展と人間の安全保障という大勢にそって、精神の喜びを目指す指針となり、

実践すること」が重要となることが指摘される。グローバル時代の今日、多様で異なる信仰、異なる文化、異なる民族の存在を保障する、いわゆる「共通道徳」(コモン・モラル)ということが注目される。その面からして本書は「一貫して宇宙、天地自然、神や仏ということ」が見直される。それゆえに、これからのモラロジは宗教の一種ではないかという疑問もたれるが、神という言葉が出てくるといふ面からしても、それは宗教的色彩の強いものが含まれる。その意味ではモラロジということより、むしろコスモロジイといった方が適切ではないかとさえ考えられる。その意味で書名が「総合人間学」を付記した『総合人間学モラロジイ概論』からなる。

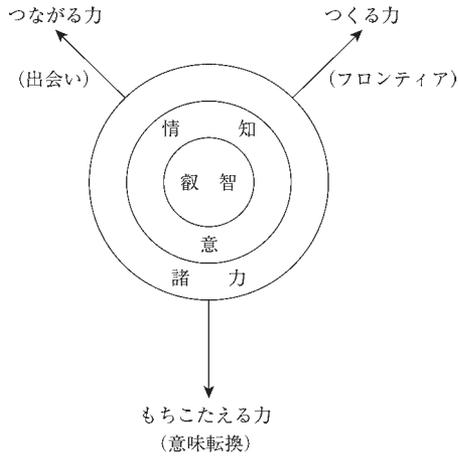
それゆえに、さらに「世界史において宗教の形をとって伝えられ活動してきたものが、倫理や道徳として偉大な働きを示し、人類の幸福実現に貢献してきたことは紛れもない事実である」とも述べられる。したがって「学問として、この事実を無視し排除して、人類の幸福を実現する道を説明することは不可能であり、誤りである」とも指摘される。それゆえに「モラロジイは学問、科学として、この歴史の事実を事実として承認し、世界の優れた宗教における信仰は排除することではないもの」と考えられる。つまり「モラロジイは、世界の諸聖人に学

び、寛大で円満な信仰心を根底に置き、人類の現実生活において、安心、平和、幸福を探索しようとするものである」といわれる。釈迦の系統を引く思想によると「色即是空 空即是色」といって世の中の人も物事も無常であり、絶えず移り変わるものにすぎない。このように考え方を変え、心を働かせることが肝要であり、道徳とはまさに人間としてよりよい生き方を目指すことにあるとされる。

ただし「人間は、善を志向し、のびやかに成長するものであるが、一方では世の悪に染まったり、これくらいと油断して誘惑に負けたり、好奇心や冒険心から落とし穴にはまったりすることがある。また後半生にいたって、社会的地位や権力が上がったために、権力を乱用して人々に疎んじられたり、贈収賄などの不道徳を犯し、能力が高いがゆえにかえって心の平安を乱したり、不幸な結果を招いたりすることがある」という。このような人々はたとえ社会における地位が高くとも結局、中国の「論語」にいう小人にすぎないものだという。その点で人間は自らの品性の向上が常に問われる。したがって、別図のような「品性の成り立ちと三つの力」が示されているのである(図参照)。

本書によるとまさに「自分の人生はロウソクのようなものであって、燃え尽きることを通じてこそ周囲を輝か

図 品性の成り立ちと三つの力



「す」ようなものであり、「今、ここに」と心に決めて、今をよりよく生きることに全力を集中することにある。したがって、人間は「個人の心と社会の中に調和、秩序、平和を実現すること」にある。ここに基礎論を結ぶ意味で最後に「普通道徳と最高道徳」が論じられている。人類の歴史を眺望すると、道徳には大きく別けて二つの存在があり、普通道徳と最高道徳がそれである。普通道徳は人類が日常におけるマナーとしての道徳である。それに対し問題は最高道徳にある。それについて

の指針として本書は、世界諸聖人の思想や道徳をあげている。その基礎にあるものはいわゆる人間学の問題ではなからうか。人はこうして学び思索し、思索して学ぶことを繰り返しながら人間として成長していくものである。したがって、「人類史には古代にへ人類の教師」と称えられた諸聖人が出現し、最高道徳という質の高い倫理道徳を開示しました。その核心はへ幸福を得んとすれば、まず人間としての品格を向上せよということにあります。世界諸聖人の教えは、救いを含め、人生の意味を実現するためのもつとも体系的な説明であり、もつとも有効な実践道徳です。飛躍のための後退は前進のための常道であり、未来創造の源泉は、温故知新、歴史からの学習にあります」と指摘される。本書はその世界諸聖人として孔子、釈迦、ソクラテス、イエスなどや古代聖人、ムハンマドなどをあげている。

本書はさらにこの最高道徳に向けて「自我没却」の必要性も指摘される。それは「個性が多様であることが、人間の社会に豊かさをもたらしているが、それはまた自己自身の発展を阻害するという共通の問題を抱え込んでいるものである。私たちの生命力や精神には、自我つまり自己中心性という性質が染み込んでおり、自分の中に恵まれている善に向かう無限の可能性を發揮できない状況に陥ることも否めない。それゆえに私たちは考え方を

正し、自我を取り去って無私・無我の心となり、宇宙自然の法則や神仏の心に同化した生来の生きる力を伸ばすよう努力することが必要である」とされる。たしかに人間というものは、世の中というものが複雑で簡単に律する事のできないものからなる。

それゆえにモラロジの目的は、このような普通道徳と最高道徳を対象として、その各々の内容及び実行の方法を比較研究し、あわせて道徳実行の効果を科学的に明らかにし、最高道徳に向けて前進して行くことにある。最高道徳は進んで実行すれば、自分の胸中に喜びの世界が開けて、自分を取り巻く社会の中で、愉快、円満に生活しながら、信頼と尊敬を得、周囲の人々を感化することができるようにもなると指摘される。そのようなことがいろいろな側面から論じられているのが本書の基礎論である。総じて本書は「いかにして見えない力をみえるようにするか」を問われたものである。その視座から本書は多面的な問題を提起しながら、総合的に纏められたものである。

3 近代知の陥穽と総合人間学——総合科学への道？——

これからの時代は人間にとつてどのようなものになるのか。いま専門という壁を超えて総合的な知が求められつつある。「生命」にかかわる問題などがそうである。

生きるということの本質が何であるかということは、見えにくい面も少なくない。半面、一方で領域横断的なアプローチをとらなければならぬ問題も増えつつある。本書はまさにそうした期待に答えてくれている。それゆえに本書から受けるインスピレーションも少なくない。

ただ余りにも単純に割りきっては生の豊饒が殺されてしまふ。そのために様々なものを寄せ集めることも不可欠となる。それを柔らかなバネで包み込むのが本書の「総合人間学」というコンセプトであったのではない。

しかし本書で直接触れられておらないので無言の時間的な流れの中で推測するほかない。それが本書に残された課題ではないのか。

しかし、その問題に入る前に本書の実践編について少し触れておきたい。現在の文明のもとでは余りにも自然から背離する生活になり、非常に物質的、機械論的なものであることが指摘され、それに対し「内なる心の多様性」の大切さが訴えられる。その視点からモラロジとしての実践編も見直される。それは基礎論の後をうけて至極く当然のことと思われる。そのためには何より自然と共存する社会を創造する徳性などが見直される。そこに初めて知識や技能も生きることになるという。そのほか本書は廣池千九郎博士やモラロジ研究所に依拠した実践論でもあり、そのことも本書としては当然と思われる。

る。

それゆえに、本書本来の立場からすれば、世の中の法律や制度を変えてみても、イデオロギーや知識などを振り廻しても大きな成果が上がらない場合には、そのコトに当たる当事側に問題であることも留意される。そのために総じて道徳の基本的な精神の涵養こそが大切であり、そこにこそ実践論としての基本的課題があると考えられる。顧みるに人間は本来、群生動物で孤独では生きられない存在であろう。また時間の持続の中に生まれ、生き、そして死んで行き、しかもそれを意識しているものである。それが人間の自然体であり、本質でもあるといえる。実践編ではその点をいろいろの角度から指摘される。

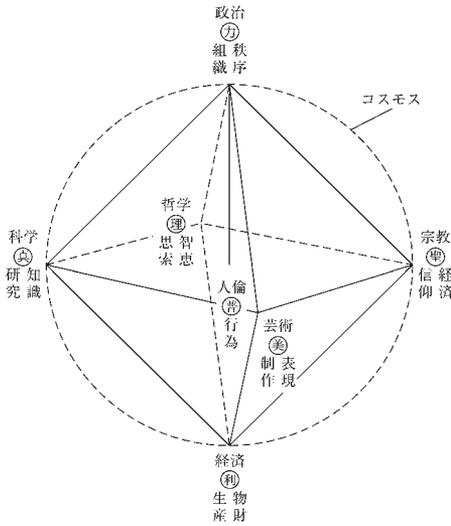
そこでさらに顧みたいことは、かつてニーチェは「神は死んだ」といった。あるいはマルクスは人間の弱さにつけ込むかのように「宗教はアヘン」であると主張したが、そこに残されたのはいまや「自然への回帰」ということではないか。彼らの立場からすれば自然科学的の考え方は理性的であり、宗教を信するのは時代錯誤ということであった。だが今にしていえるのはそうではなく、もう一度神が蘇ることが期待されているのではないか。固有な文化（古層Ⅱ共同体）の見直しの具体的イメージはむしろ暮らしの中に自然を回帰させることにある。す

で人工衛星が象徴するように現代人はむしろ宇宙人を目指しているのである。宇宙的共感や空間も見直されつつある。したがって、彼らから少し遅れてフランスの人類学者レヴィ・ストロースなども『野生の思考』（一九六二）を公刊し、そこでやはり「自然からの見直し」を訴えられる。

それゆえに、今日からすればむしろ近代知の陥穽や地球環境問題などから「自然への回帰」は避けて通れない問題でもある。そこで問題はその「自然への回帰」の自然をどう捉えるかであろう。それによつては自然観も異なってくる。それには西欧近代の物心二元論的な機械論的な自然観もあれば、そうではなくアニミズム的なもの、あるいは生態的な自然観もあろう。本書が提唱する自然観は、近代合理主義を支える西欧近代の「機械論的自然観」（要素還元主義・物心二元論）というものではない。したがって、本書が言うように生態史観に近い立場からすれば事情が大きく異なる。

そこにおけるあらゆる生き物は食物連鎖が象徴するように、それは植物に始まることにもなるが、植物は太陽との光合成によるものであり、植物（生産者）もバクテリア（分解者）もなくなれば太陽の光合成も不可能になり、それではすべての生き物が生きられないことになる。したがって、太陽が消滅すると地球上のありとあら

図 文化諸領域の統合システム



ゆる生物は死滅することになる。その意味からすれば太陽はまさに地球の女神であり、故人のいうアマテラスオオミカミ論の地平も見えてくることにもなる。そのほかそこでは当然「近代知の陥穽」が見直され、目指すところは近代知を超えていくことが透視される。それは西洋の権威が崩れていく中で当然として、かつての東洋的な社会の自然観なども見直される。換言すれば異質なものと融合化がそれである。

したがって、それは東西の文明対立にあるのではな

く、歴史的回顧の動きが目につく今日、むしろ「西洋を東洋で包み込む」融合化に向けての模索がそれである。それはエコロジーなどを考慮する生態史観に近いものである。それは本書が目指す自律的な「共生社会」ではないかと思われる。それこそがまた本書の書名でもある『総合人間学モラロジー概説』の「総合人間学」というコンセプトではないのか。それについては本書は直接触れていないが、そのようにも想定される。それだけに、そこでは諸々からなる諸学を総合する方法的課題も意識されよう。それが本書の問題意識ではなかっただろうか。

たしかに科学が目指すものと宗教が目指すものとは異なる。科学は自然界の事実を解明し、それらの事実を整合的に捉えていくことにある。それに対し宗教は人間的な目的、意味、価値などを捉えていくことにある。それゆえに科学と宗教という両者の文化領域は、確かに異なる。お互いに立場の相違はあっても、対決するのではなく対話を求めていくことにある。まさに両義性の世界がそれである。そこでの否定はこれを裏から見れば別の肯定でもあるのだ。それゆえに、「無」は「一切」の反対に位する概念ではないのである。その意味で最近「利己的な遺伝子」で知られる分子生物学者で知られているリチャード・ドーキンス氏が『神は妄想である』(The God

Delusion, 2006, 垂水雄二訳、早川書房)という著作を公刊しているが、それは「科学とキリスト教」の世界に依拠していることである。

そのような鋭い二極分化の図式は西洋の歴史においてのことであり、西洋人が西洋人のために書かれる他者意識とも考えられる。わが国のようなところではどうであろうか。歴史的文脈が異なる。わが国で「宗教」と「世俗」の間を一律に線引することは難しい問題である。周知のように日本は一神教の国でなく、神仏習合的な多神教国家である。宗教のヴァージョンが複雑な構造からなる。日本の社会構造は二者択一で割り切れるものでなく両義的であり、それを総合するところの処方、方法論も問われよう。私はそれを別図のような形で考えていた。社会科学に限定しても「体制(理論)・段階(政策)・類型(歴史・比較)」という方法的なものがあろう。

たしかに現代世界は大きな曲がり角を迎え、さらに「知の変貌」が不可避となっている。このようなことは何らかの方法的な問題が問われなければならない。いろいろな事を思いつくままに次から次へと並べ立てることにとどまると、それは片方からみればうっかりすると雑学居士ということにもなる。それでは体系化の問題が残る。今にして本書にいえることは科学に対する科学的方法を見出していくことにあるのでないかとも考えられ

る。それはむしろ故人が私たちに言い残された課題でもあるといえる。